

# 京都の改革

1

## 市民が子供育てる伝統

子供たちの週末のため、地域が豊富なメニューを用意する。

ぼくかさず、8歳と5歳の姉妹を連れて受講している中学校教諭の女性(44)が、講座の魅力を語る。

土曜塾への登録は、継続的

的なボランティア活動にしよう」と学生が提案した。「幼児やお年寄りと学生が一緒に踊る姿に、『これが地域で活動することか』と実感しました」。サークルOBで大学院生の関口良太さん(23)が振り返る。

\*

「土曜塾」は、学校週5日制を受け、週末を中心にも多彩な学校外の場を用意し、「まち全体を学びと育ちの場にしよう」と2004年度から始まった。これまでの3年間で開かれた講座は延べ約6000人。参加者も募集定員ベースで延べ約12万人にもなった。

「学生さんの面倒見が良いので、子供たちは、開講日は友達と遊びより、踊りに行きたがるんです」  
開講した2年前から、ほ



## 教育ルネサンス

No.514



佛教大学のよきいサークル「紫踊屋」は、土曜塾で子供や保護者に踊りを教える

**放課後子どもプラン** 国が地域の教育力を高める方策の目玉として新年度から、文部科学省と厚生労働省が取り組む、放課後・週末の子供の居場所作り事業。地域住民が参画し、勉強やスポーツ、文化活動などの機会を作っていく。新年度予算案の額は約226億円。国は約2万ある全小学校区で実施させたい意向だが、自治体にも財政負担を求めるため、実施時期は各地で異なる見込みだ。

敦彦さん(35)は、「もともと伝統工芸や芸能を継承する団体が多く、自ら『子供に技術や知識を伝えたい人』が豊富にいる。私たちの役割は、そんな大人と子供の橋渡し」と説明する。小司さんの言葉を裏付けるように、「土曜塾」は初年度から約1000団体が参加する盛況ぶりとなつた。明治政府に先駆けて、番組(自治組織)ごとに、住民が資金を出し合って小学校を作つた伝統が、市民が教育にかかわろうという気風につながつてゐる。

(木田滋夫)

それぞれの講座を運営するのも、学生団体や市民グループ、企業など、様々だ。紙工作や料理教室、英会話といった一般的なものだけでなく、和菓子店による「八つ橋」づくり、能楽協会による能の鑑賞や和楽器体験、陶芸団体による清水焼体験、太秦映画村での江戸時代の暮らし体験、保存団体による京言葉を学ぶ講座など、京都らしいメニュー

がふんだんにある。無料、有料はあるが、希望する小学生は、どの講座にも参加できる。

\*  
市教委は年9回、登録団体の講座内容や開講日を網羅した情報誌「GOGO土曜塾」を発行し、市内の全小中学生世帯に配布。講座が検索できるホームページ

も作るなど、常に情報提供を心がけている。これだけの市民がかかわるようになつても「最近まで存在を知らなかつた」という声が届くからだ。また、市教委が「後方支援」に徹するのに、地域住民に主体的にかかわつてもらう狙いもある。